

〔吾妻鏡 十七〕正治三年元年中 十月二日己卯、入夜觀清法眼、潛參江馬太郎殿館申云、中 亭主仰云、

○中 但有急事、明曉欲下、向北條兼合門出畢、就今告非構出、稱耻貴房推察、召出旅具至、悉、在此、中、等、令、見給云云、

〔太平記 十八〕越前府軍并金崎後攻事

正月延元二年 七日、椀飯事終テ、同十一日、雪晴風止テ、天氣少シ長閑ナリケレバ、里見伊賀守ヲ大將

トシテ、義治五千餘人ヲ金崎ノ後攻ノ爲ニ、敦賀へ被差向、其勢皆吹雪ノ用意ヲシテ、物具ノ上ニ  
蓑笠ヲ著、踏組ノ上ニ橋ガシキヲ履テ、山路八里ガ間ノ雪踏分テ、其日葉原迄デ寄タリケル、

〔宗五大草紙 下〕公方様御成の様體の事

一、雨ふり候時、御こしにゆたんかけられ候事は、公方様御輿には見及不申候、御旅にて一段雨降  
風吹候へば、懸られ候由候、さ候へば御供衆も蓑をめし候、

〔朝倉始末記 八〕一揆與大將合戰之事

一、揆ドモ是ヲ見テ、彼討テ此討テト、聲々ニ喚リケレドモ、一堪モ不堪、後陣ヨリ颯ト崩レケル程  
ニ、若林ガ勢勝ニノリ、四方八面ニ追散ス處ニ、中 討漏レタル者共モ家ヲ焼レ、蓑笠モ不著シテ、  
雪ノ降ルトモ不言シテ、徘徊スル形勢哀也ケル次第ナリ、

〔翁草 百八十八〕秀忠公之略傳

或本秀忠公の御母儀、西郷局の父服部平大夫は、本伊勢國の者也、明智光秀叛逆の時、家康公は泉  
州堺の今井宗薫が方へ御茶に入て御座しけるを、平大夫馳著、委細を告奉りければ、大に驚給、御  
評定の上、堺を御立有て、伊賀越に三州へ歸らせ給ふ、間道を御忍の事なれば、平大夫蓑と笠を奉  
り、夫々平大夫を蓑笠之介と云べしと被仰、常に奉仕せり、

〔米澤侯賢行錄〕藉田の古法に倣て城南の郊に一町餘の田地を御手作場と定られ、君治、上、杉、宗、廟